

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520416

研究課題名（和文）琉球方言の授受動詞・指示詞に関する体系的研究—古代語との類型的対照—

研究課題名（英文）A Comparative Study of *Yari-Morai* and Demonstrative Constructions in Ryukyuan and Pre-Modern Japanese

研究代表者

荻野千砂子（OGINO CHISAKO）

大分大学・教育福祉科学部・講師

研究者番号：40331897

研究成果の概要（和文）：南琉球語の授受動詞体系には、共通語のような人称制約や視点がなく、敬語動詞では敬意優先の体系があることが分かった。八重山地方の宮良方言の *tabooruN* は、主格を明示せず、上位者から下位者への授与を方向で表す文法を持つ。よって、与え手主語と受け手主語とを取れる。これは室町時代の授受動詞「給はる」と酷似する文法である。人称が関係しないのは指示詞でも同様である。文脈指示でも、記憶指示用法に共通語と異なる文法が見られた。

研究成果の概要（英文）：This study describes Ryukyuan verbal constructions indicating giving and receiving (*yari-morai* constructions), and shows that honorific *yari-morai* verbs in Yaeyama Ryukyuan have a system closely similar to that of Pre-modern Japanese. The honorific *yari-morai* construction in the Miyara dialect of Yaeyama Ryukyuan, expressed with *tabooruN*, does not have person restrictions on the NP expressing the giver or receiver, unlike in Modern Common Japanese. These NPs do not need to be marked with nominative case. The construction indicates the movement of the object from the higher-status person (giver) to the lower-status person (receiver). The giver takes the ablative case, and the contrast in the meanings expressed by *kudasaru*, *oataeninaru* and *itadaku* in Common Japanese is lost. This grammar is similar to construction in Pre-modern Japanese. Demonstrative expressions in the Miyara dialect were also investigated, and shown to have no relation to grammatical person. It is shown that deictics are generally expressed with the *u* series demonstratives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：授受動詞，敬語，視点，人称制約，琉球，中世語，タボールン，給はる

1. 研究開始当初の背景

(1) 南琉球八重山地方の非敬語の授受動詞に、*hiruN*と*iruN*がある。*hiruN*はヤル・クレルに相当し、*iruN*はモラウに相当する。ヤル・クレルの対立がないということは人称制約がないということである。ヤル・クレルの対立がない方言は、日本本土の周辺部の東北や九州で見られる。よって琉球方言にも同様の文法があるといえる。しかし、モラウ相当語や敬語形を含めた授受動詞全体が、どのような文法体系であるのか言及した研究はない。そこで、まず、人称制約の有無から調べることにした。

(2) 八重山地方では「いらっしやいませ」のことを *oori toori* もしくは *oori taboori* という。*taboori* は中世語の「給はれ」とよく似た音声形である。日本語史では、中世末に「給はる」が衰退を始め、近世期以降はクダサルが用いられることになる。一方「給はる」は現在、文章語やスピーチでかろうじて使用されているのみである。しかし、地域によっては依頼形の「たもれ」がまだ使用されているところもある。そのため、琉球語の *tabooruN* も「給はる」系の語ではないかと考え、両者の関係を比較することを考えついた。一般的には、琉球語は奈良時代以前に本土方言から分岐したという説があり、中世語が関与していることは考えにくいことではあるが、検証する価値はある。もし、*tabooruN* が中世語「給はる」と関係を持つと結論づけられると、中世における本土方言と琉球方言とのつながりを考える一つの契機となる。

(3) 現代共通語の指示詞では、一人称とコ系指示詞、二人称とソ系指示詞、三人称とア系指示詞が連動する。しかし、以前の調査では八重山地方の指示詞には人称との関係がなかった。先行研究では *ku* がコ系、*u* がソ系指示詞としているが、調査した結果、*ku* 系指示詞は、人称と関係なく、聞き手が持っているもので、自分が特定できるもの、例えば自分の湯呑みなどは、「*kuri* 取って(*コレ、取って)」と聞き手に依頼できる。共通語では、聞き手(二人称の人物)がコップを持っていると、「{*コレ/ソレ}、取って。」のようにソ系指示詞のソレでしかいえない。このように八重山地方では指示詞は人称と連動しない。しかし、指示詞全体で、どのような体系があるのかが未記述のままである。また、文脈指示との関係についても分かっていない。そのため指示詞全体の記述を試みた。

2. 研究の目的

(1) 先述した通り、八重山地方の授受動詞体系を記述することを第一の目的とした。古

代語の場合、クレルは与え手主語を表す。一人称主語でも使用でき、「私が彼に～をクレル」相当の文が言える。これは、人称制約や一人称寄りの視点がないためであり、現代語のようなヤルとクレルの対立がない。現代のようなヤル・クレル・モラウの体系が成立したのは室町時代末期以降である。授受動詞でヤル・クレルの対立がない地域があることは広く知られているが、これまで、方言文法において授受動詞体系全体をとらえる研究はなかった。本研究は、南琉球の八重山地方での非敬語形・敬語形の授受動詞を体系的に記述することを目的とし、ヤル・クレルのみならず、モラウに相当する語や敬語形での文法も詳細に記述することを目的とした。

(2) 話者の説明によると、八重山地方の敬語 *tabooruN* はクダサルやイタダクの意味を持つという。現代共通語ではクダサルは与え手主語の動詞であり、イタダクは受け手主語の動詞であるため、当然主語が異なる。与え手主語と受け手主語の両方の用法を持つのは、室町時代の「給はる」である。そこで、*tabooruN* と中世語「給はる」との比較を詳細に行い、文法を検証する。その際、宮良方言の *tabooruN* を中心に調査を行うが、八重山地方の他の地域でも *tabooruN* を使用するかどうかを調べ、使用する場合には同様の文法を持っているかどうかの調査を行う。

(3) 八重山地方の指示詞は *ku* 系、*u* 系、*ka* 系があるが、現代語の指示詞と異なり人称との連動がないことは分かった。しかし、現場指示用法について、どのような文法体系があるかについて記述ができていない。そこで、現場指示用法の記述を行うこととする。また、文脈指示用法の記述を行うことも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査地点として八重山地方石垣市の石垣方言、宮良方言、川平方言と、竹富町の黒島方言を選んだ。いずれも *tabooruN* や *tooruN* (*tabooruN* の音声変異形) を使用する地域である。最初に、簡易調査をして授受動詞の非敬語形と敬語形の体系を記述する。調査方法は、主に話者への質問形式で、調査者が作った共通語文を各方言に翻訳してもらったり、調査者が作成した方言の文が文法的に許容できるか否かを判断してもらったりした。

(2) *tabooruN* を、一人称主語の文「私が～から～をイタダク」で使用しようとする、話者は許容せず、*taboorari(ru)N* に置き換える。しかし、*tabooruN* の意味を尋ねるとイ

タダクと答える。イタダクの意味があるということは、受け手主語の用法を持つということである。それなのになぜ、一人称の受け手主語「私が～から～を *tabooruN*」が許容されないのが不明であった。そのため、主語の人称を変えて二人称主語での受け手主語の用法を調査することにした。また、モダリティとの関わりを調べたり、テンス・アスペクトの差によって許容度に変化がでるのかを調べたりすることにした。

(3) 古代語の調査は、中古・中世の和文資料を用い、「給はる」の構文を調査することにした。だが和文資料だけでなく、古文書や古記録にも用例が見られることがわかり、中古や中世の古文書や古記録での「給はる」の用例も調査することにした。

(4) 現場指示を調査するため、距離が異なる場所に物を置き、話者に *ku* 系、*u* 系、*ka* 系のどの指示詞を使うかと尋ねると、おおまかに近称は *ku* 系、*u* 系、遠称は *ka* 系指示詞を用いる。しかし、遠称の場合、話者はすべての指示詞の使用を許容する。よって、切り分けができなかった。そのため、予定を変更して、文脈指示詞用法を先に調査することとした。しかし、文脈指示でも切り分けができない場合が多い。そのため、調査方法を変更し、自然談話を取り、その中の文脈指示詞を検証することにした。

4. 研究成果

(1) 八重山地方の授受動詞体系の概要を述べる。非敬語形について、宮良方言ではヤル・クレル相当語に *hiruN* を用いる。人称による対立はない。また、モラウ相当語 *iruN* にも人称制約がなく、非敬語形の体系は一人称寄りの視点がないと結論づけられる。敬語形を調査すると、敬意が対象の人物にあるか、動作主にあるかで動詞が選択されるという、敬意の視点があることが明らかとなった。そのため、上位者から下位者への授与において、上位者側に視点を置くとオアタエニナルやクダサルという意味解釈となり、下位者に視点を置くとイタダクの意味解釈がでることが分かった。一方 *taboorari(ru)N* は受け手主語用法のみで、イタダク専用で使用される。この体系は基本的に宮良方言、石垣方言、川平方言、黒島方言でも同じである。一人称受け手主語のイタダクの場合は、*tabooruN* の受身形を用いて *taboorari(ru)N* とすることが多い。黒島方言では *tabooruN* は与え手主語で尊敬語、*taboorari(ru)N* は受け手主語で謙譲語という対立が、かなり明確にある。

敬意の視点がある *tabooruN* の文法的特徴を調べるために、新たに構文の面からの調査

と考察を行った。その結果、「与え手Aが受け手BにCを *tabooruN*」という主格を明示する構文だけでなく、「与え手AからBへCを *tabooruN*」という奪格「から」を用いる構文の方が使用しやすいことが明らかになった。つまり、上位者から下位者への授与を方向で示す構文である。*tabooruN* は主格を明示せずともよい構文を持っていると言える。

(2) *tabooruN* が奪格を取り、主格を必ずしも取らない構文であることが分かったため、当初の計画を変更し、古代語「給はる」についても構文面からの考察を行うことにした。すると、「給はる」も「AよりBにCを給はる」と奪格「より」を使用する構文を持つことが分かった。*tabooruN* にも「給はる」にも、一人称寄り視点がなく、上位者から下位者への授与を方向で示す用法があるため、オアタエニナル・クダサル・イタダクという複数の意味が可能となるのではないかと考えた。

(3) *tabooruN* と「給ふ」の共通点として、受け手主語を受身形で産出するということを指摘した。古代語は与え手主語の用法を持つ「給ふ」に対して、受け手主語の場合は「給はる」を用いる。「給はる」は四段動詞なので「給ふ」の語彙的な受身である。受身形で受け手主語を表す語は他にもあり、与え手主語の「下す」に対して、受け手主語の「下さる」がある。また、与え手主語の「たぶ」に対して、受け手主語の「たばる」がある。授与を方向で表すために、受け手主語の場合は、受身形で産出するのではないかと考えた。八重山地方の *tabooruN* も、受け手主語の場合に、*taboorariN* という受身形を産出した。これらは上位者から下位者への授与を方向で示す構文に共通して見られる特徴ではないかと考える。

(4) 指示詞に関しては期待したような成果が上がらなかった。非文法的な文が見つからないのである。現場指示でも文脈指示でも、*ku* 系、*u* 系、*ka* 系指示詞がどれもが使える場合が多く、非文法的な例が見つからない。今後、地道に談話資料をとり、用例数を増やしていくことで帰納的な分析を行うしかないと考えている。現在、指示詞の調査のために談話資料の作成をしている。これまでの調査で、文脈指示詞は *u* 系指示詞（共通語でのソ系指示詞に相当する）を用いるため、共通語ではア系指示詞を取る記憶指示、例えば「あれは楽しかったね」のような場合でも、*u* 系を用いることを明らかにできた。しかし、一方で *u* 系だけでなく、*ku* 系、*ka* 系指示詞で言っても違和感があまりないということ

も分かってきた。そのため、石垣宮良方言の指示詞 *ku* 系, *u* 系, *ka* 系指示詞の文法は未解決のままである。引き続き来年度以降の課題とする。

(5) 敬語を調査していると、謙讓語について新たな疑問点が出てきた。八重山地方では「謙讓語+尊敬語」で、主語と補語を同時に敬うことができる二方面敬語を使用することができる。「謙讓語+尊敬語」の組み合わせは共通語では通常用いない。しかし、共通語でも、「主語<補語」の人物関係であれば、「田中先輩が井上先生に本を差し上げられた」のように「差し上げる」+「られる」を用いてもそれほど違和感はない。しかし、「主語>補語」の人物関係では非文法的と判断される。しかし、八重山地方では「知事が市長に花束を差し上げなさる」のように「知事>市長」の人物関係でも使用可能である。話者は知事の方が上位者であると認識している。現在は、この仕組みを明らかにすべく、謙讓語Aの文法に関して調査と考察を進めている最中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 荻野千砂子(2013)「中古語謙讓語と石垣方言謙讓語の比較」『筑紫日本語研究 2012』査読無 in press
- ② 荻野千砂子(2013)「八重山地方宮良方言の謙讓語ウヨーフンに関して」『人文・社会科学を主体として先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成・研究推進プロジェクト』2 査読無 pp. 243-246
- ③ 荻野千砂子(2012)「南琉球石垣地方の指示詞について」『筑紫日本語研究 2011』査読無 pp. 46-49
- ④ 荻野千砂子(2011)「八重山地方の授受動詞タボールンと中世語「給はる」」『日本語の研究』7-4 査読有 pp. 39-54
- ⑤ 荻野千砂子(2011)「琉球八重山地方の授受動詞の二方面敬語」『国語の研究』36 査読有 pp.10-20(横)

[学会発表] (計 10 件)

- ① 荻野千砂子「南琉球の敬語授受動詞タボールンの主格をめぐる」九州方言研究会 2013年1月12日 熊本大学
- ② 荻野千砂子「八重山宮良方言のウヨーフン(差し上げる)の用法」筑紫日本語研究会 2012年12月28日 九州大学
- ③ 荻野千砂子「中古語謙讓語と石垣方言謙讓語の比較」筑紫日本語研究会 2012年8

- 月10日 九州国立大学九重共同研修所
- ④ 荻野千砂子「動詞によって異なる二方面敬語の用法」九州方言研究会 2012年1月7日 熊本大学
 - ⑤ 荻野千砂子「日本語共通語と琉球語の指示詞の相違について—上代・中古の記憶指示との関連—」東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2011年11月5日 フランス国立東洋言語文化研究学院(フランス)
 - ⑥ 荻野千砂子「南琉球石垣地方の指示詞について」筑紫日本語研究会 2011年8月9日 九州国立大学九重共同研修所
 - ⑦ 荻野千砂子「八重山(石垣四箇・宮良・黒島)方言の授受動詞」沖縄言語研究センター 2011年1月22日 琉球大学
 - ⑧ 荻野千砂子「南琉球石垣方言の敬語と授受動詞の関係」大分大学国語国文学会 2010年11月13日 大分大学
 - ⑨ 荻野千砂子「八重山地方授受動詞の補助動詞用法について」筑紫日本語研究会 2010年8月10日 九州国立大学九重共同研修所
 - ⑩ 荻野千砂子「「たまはる」に関する考察」九州大学国語国文学会 2010年6月6日 九州大学

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻野千砂子 (OGINO CHISAKO)
大分大学・教育福祉科学部・講師
研究者番号: 40331897